

特集

生産者から見たパートナーとは？

農魚産物といった一次産品を取扱うマーケットが多様化していることは、日本全国どの地域においても感じることはできるのではないだろうか。農魚産物直売所、道の駅、インショップが急増している。消費者にとっては、地産地消という点や近くにいる生産者が作ったものという安心感、そして安さが利点になっていることが多い。一方、生産者にとっては、これまでの出荷形態で取り扱ってもらえなかった規格外農産物の出荷、生産者のこだわりを商品に付加できる、など様々な利点があると考えられている。このような利点は、生協産直が長年実現してきたことであり、また求めてきたものであるだろう。

しかし、一見好調に見える農魚産物直売所も、一般小売業や直売所どうしの競争が激化しており、直売所それぞれが何らかの特徴や理念を掲げながら運営していくことが求められるようになってきている。すなわち、直売所も生協産直と同じような問題を抱えるようになってきたといえる。

そこで、今回は、急増する農魚産物直売所のうち特徴的な事例や地域内産直に向けて生産者情報を収集する「産直新聞」を取り上げ、現在の農産物流通に関して生産現場が抱える問題について考えてみたいと思い、特集を組むこととなった。農魚産物直売所では、学校給食に女性グループが取り組んできた「にんじんの会」、日本で初めて農協と漁協が共同出資する「鳥羽マルシェ」、そして生協産直に長年関わってきた「紀ノ川農業協同組合」に取材をお願いした。また、くらしと協同を訪ねてのコーナーでは、沖縄県における漁業市場について詳細に紹介してもらった。これらの国内情勢に加えて、海外の協同を訪ねてでは、近年急速な発展を見せている韓国の生協産直運動について紹介していただく。

これらの情報は氷山の一角にすぎないかもしれないが、今後、世界をリードしてきた日本の生協産直が、活路を見出すためのヒントになれば幸いである。

(本誌副編集長 青木美紗)

1. 食を通じたまちづくりにむけて～「鳥羽マルシェ」がめざすもの (岩橋 涼)
2. 地場産農産物を用いた学校給食の成立条件
～生産者グループ「にんじんの会」のとりくみから (山野 薫)
3. 「人」に関心を持った産直交流へ～和歌山県紀ノ川農協の取り組み (加賀美 太記)
4. 生産者の想いを伝える「産直新聞」 (毛賀澤 明宏)